



THREE BLADES. ONE GILLETTE.

Ferdinando Frega — Nando the Scribe

三枚の刃。ひとつのGILLETTE。

われわれが本当に持っているものはすべて — 音もなく、自覚もなく — それでも前へ進んでいく。

時間のように。

尋ねない。予告しない。

やって来る。

それには名前がある。運命。

かつてひとりの男が、記憶に残る人間になろうと決めた。

その土地でだけではなく。ひとときだけでもなく。

人類のために。

機会は一度きりだった。

アメリカのある午後、彼は地面から捨てられた刃を拾い上げた。

瓶の王冠を発明したのは別の誰かだった。

彼は別のものを見た。

製品を改良したのではない。

ひとつの所作を書き換えたのだ。

ひげ剃りはシステムになった。

刃は使い捨てになった。

名前は永続するものになった。

人々はその製品を買うとき、

彼の名前を口にした。

キング・キャンプ・ジレット。

フリーメイソン。

1894年の『The Human Drift』の著者。

私の父。

鉱夫と、貴族の母とのあいだの息子。

手をかけて育てられた。限界なしに作り上げられた。

12歳で、大の男たちに恐れられた。

乱暴だったからではない —

ためらわなかったからだ。

ある夜、映画館へ向かう途中、

年上の集団に襲われた。

ひとり。

逃げ場なし。

地面にカミソリの刃を見つけた。

拾い上げた。

そのうちのひとりの顔に、傷を刻んだ。

連中は逃げた。

あの瞬間は、決して去らなかった。

14年後。

候補者120人。

席はひとつ。

彼は3位だった。

上の二人は交渉した。

彼はしなかった。

Gilletteイタリアに入った。

そして40年とどまった。

定年のあとも、何も変わらなかった。

人々は相変わらず通りで彼を呼び止めた。

相変わらず彼だと分かった。

名前で、ではない。

彼が体現していたもので。

フレーガ。

Gilletteの男。

刃。

毎週月曜、朝早く出ていった。

毎週金曜、帰ってきた。

一度も不平を言わなかった。

一度も説明しなかった。

それが私の父だった。

ある日、父は誰かに、本当に自分に似ている息子は私だけだと話した。

私がそれを知ったのは何年もあとだ。

それが父のやり方だった。

宣言はない。

あるのは方向だけ。

私は19歳だった。

兵役。

警察の試験には合格。

1985年5月、父はナポリで私に会った。

父と子の対面ではなかった。

仕事の話でもなかった。

別の何かだった。

父はひとつだけ尋ねた。

「おまえは自分の人生をどうするつもりだ」

圧力なし。

助言なし。

それだけ。

私は7日かけた。

それから、Gilletteにつながるコンソーシアムに入った。

ありうるかぎり最低の役職。

いちばん下から始めるものだ、

頂上を見たいのなら。

18年。

そこに達した。

それから、何かが終わった。

金ではない。

地位でもない。

興味だ。

だから去った。

父はもう一度、内々に私と会った。

すでに引退していた。

引き止めようとはしなかった。

分かる、と言った。

こうなることは、ずっと分かっていたのだ。

私が父に似ていたから。

予測がつかない。

つねに、より良い何かへ向かって動いている。

2003年11月30日。

私は母なるGilletteのもとを去った。

だがDNAは失わなかった。

三つの物語。

三つの瞬間。

これは四つ目だ。

1993年からフリーメイソン。

ピタゴラス。

秘教の修練。

荒い石を手に取り、

重みを支えるものに変える。

頭が研ぐのは、

心が養うものだ。

私は国際的なマネージャーになった。

世界を旅した。

さらに18年。

それからある日、

書きはじめた。

1冊ではない。

2冊でもない。

10冊でもない。

50冊でもない。

100冊でもない。

1600冊以上。

数えるのはやめた。

私は認められたい。

だが本は売らない。

アクセスを与える。

システムは私をどこに置けばいいのか分からない。

すべてを無償で配る独立の著者は、

カテゴリーではない。

問題だ。

私はシステムを攻撃しない。

もっとひどいことをする。

そこから価値を取り去る。

彼らは私を読む。

だが私を管理できない。

値をつけられない。

枠にはめられない。

私は支配されない。

私には値段がない。

何も売らないからだ。

運命は、決して予期されない。

私のように。

だが、それは存在する。

そして私はいまも、それに向かって動いている。

ナンド